

## 香取遺産

vol.155

ときざきてんじんだい  
鶉崎天神台古墳

鶉崎天神台古墳は、市西部の鶉崎地区にあった古墳です。大須賀川を見下ろす台地先端に築造された東西40m・南北32mの円墳で、円墳としては市内有数の規模を誇ります。山砂採取事業に先行して昭和48(1973)年に発掘調査を行った結果、墳丘の中央から粘土槨<sup>ねんどかく</sup>と呼ばれる埋葬施設が発見されました。

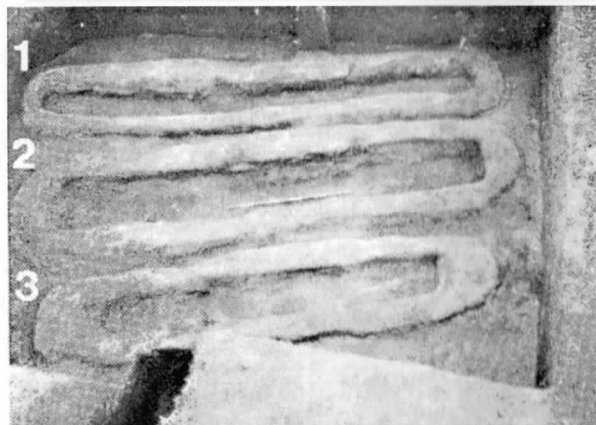
粘土槨は、遺体を納めた木棺の周りを粘土で覆ったもので、古墳時代の前期から中期にかけて用いられた埋葬方法ですが、千葉県内では数少ない事例となっています。本古墳では、長さ6.5～8.2mの粘土槨が3基並んで検出され、粘土の厚さは約50cmです。木棺は腐朽して残っていませんが、棺を覆う粘土の断面形から、丸太を縦に割って内部を割り抜いた「割竹形木棺」であったと考えられます。また、人間の身長に対して、このように長い木棺を使うのは、古い時期の古墳の特徴です。

棺内からは、鉄剣<sup>かっせき</sup>や滑石と呼ばれる軟らかい石で作った刀子<sup>とうす</sup>(ナイフ)・斧<sup>うすだま</sup>・白玉などが出土しました。これらの出土

遺物から、本古墳の築造年代は、5世紀前半ごろと考えられます。

周辺には、大戸地区の大戸天神台古墳(4世紀)、森戸地区の権現前古墳(5世紀後半)・大法寺古墳(6世紀前半)、大戸川地区の禅昌寺山古墳(6世紀中ごろ)といった前方後円墳があり、大須賀川流域を支配した歴代の首長墓と考えられています。鶉崎天神台古墳は前方後円墳ではないものの、市内有数の大型円墳であることから、大戸天神台古墳の次世代の首長墓かもしれません。

図 生涯学習課 ☎(50)1224



◀ 鶉崎天神台古墳の粘土槨